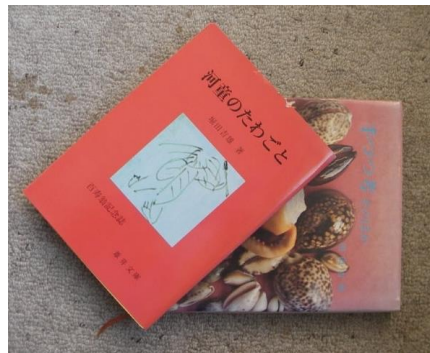


堀田吉雄先生は明治32（1899）年津市の生まれで、平成13（2001）年7月28日に102歳に桑名で亡くなられた。19世紀・20世紀・21世紀と実に3世紀、明治・大正・昭和・平成を生き抜かれた。先生は若い時は朝鮮の高等女学校で教鞭をとられ、戦後の新制中学校発足で、四日市の新制中学に勤務された。その後、昭和25（1950）年から31年まで、桑高に勤めておられ、うち28年から31年は定時制の主事をされている。私が桑高に通っていた時（27年4月から30年3月）に、堀田先生の授業を受けたことはなかったが、全校生を対象にした話を一度だけ聞いたことがあった。話の中身は忘れてしまったが、紋きり型の教師でなく、少し変わった教師だったと記憶している。私の在校時代は主として定時制に居られたので、余り接点なかった。

先生は定時制時代に修学旅行に付き添って上京した折に、世田谷区の柳田国男氏を訪ねた。それがきっかけとなり、民俗学に進むことになった。昭和26年に「伊勢民俗学会」を立ち上げられた。間もなく定年を迎える歳になっての出発である。以後40年余りの間に、三重県はもとより、全国的な民俗学者として活躍された。



堀田先生の著書の一部

風貌が「河童」のようで、あだ名になっていた。

私は大学の卒業論文に桑名のことを書こうと、桑高時代にお世話になった水谷秀義（のち新左衛門）先生に相談したら、桑高郷土研究部が発行している『久波奈』5号（昭和32年）を貰った。その中に堀田先生が『十六世紀の桑名瞥見一十楽の津時代を中心に一』という論文を書かれていた。早速に西方の堀田先生宅を訪ねて、教えを乞うた。その時に先生は細かい字で書かれた古文書を読んでおられた。矢田磧の人が書いたものだと聞いた。その時の私はその古文

書に関心がなかったので、聞き流した。後年になって「桑名日記」だと気が付いた。

昭和50年に私は桑名市文化財調査会（のち審議会）委員となった。会長は杉山和吉氏で、堀田先生が副会長だった。それ以後調査会の会議でしばしばお目にかかり、会議の後での懇親会で、蘊蓄ある話を聞かせてもらった。さらに年1回の研修旅行では旅館や車中での雑談の中で、大いに知識を得ることが出来て、毎回の研修旅行が楽しみだった。大概是1泊で、能登・福山・東京・横浜などに出かけた。なかでも堀田先生の研究フィールドである沖縄は2泊で、観光案内では見られない処、聞けない事柄を教えてもらった。民俗学は人間性の溢れる学問であり、その根底に人間の性（セックス）がある。赤裸々なセックス談義を聞かされたものだ。

先生の関心は沖縄から韓国・中国・ネパールへと広がって行き、90歳を過ぎても海外にしばしば旅行された。ネパール空港でのエピソードでは、税関を通る時、パスポートを提示すると、係官が「OH! HAPPY」と握手を求めてきた。なにしろパスポートの生年は1899年であり、前世紀なのであるから、係官も感激したようだ。

先生の長生きの秘訣は、幾つになっても探究心を絶えさないことであろう。最晩年にネパールへ出かける熱心さには、驚かせられる。それと何歳になっても異性への関心を持ち続けられたことであろう。たしかカジマヤー（沖縄の風習で数え年の97歳のお祝い）の祝賀会の席だったと思うが、先生は三重県文化財保護審議会の委員を勤めておられ、また『松阪市史』の編さんに携わっておられたので、それらの事務局の若い女性たちも数人出席していた。彼女らは堀田先生を取り囲んで離さず、先生も嬉しそうに談笑しておられた。

私も堀田先生を見習って長生きしいと思っている。